MUSASHINO for TOMORROW Vol.123

巻　頭

短歌の音と イメージの広がり

東 直子（歌人・作家）

卒業生の留学ライフ

様々な壁を乗り越え、演出家の道へ

小澤可乃（演出家）

表紙：江古田新キャンパス竣工記念特別演奏会　ケマル・ゲキチ × 福井直昭　ピアノ・デュオリサイタル
ベートーヴェンホール（2017年6月30日）

October 2017
vol.123

短歌の音と イメージの広がり

● 東 直子（歌人・作家）●

やさしい言葉、やわらかな言葉を駆使して独自の斬新な世界へいざなう、歌人の東直子さん。五・七・五・七・七の僅か31文字の表現形式である短歌は、声に出して読む際のリズムや音も大切なポイントと言われます。音楽にも通じる短歌の奥深さと面白さ、味わい方を、小説家の顔もお持ちの東さんが紹介してくださいました。読み終えたら、あなたも一首つくってみたくなるかも…。

東 直子 *Naoko Higashi*

歌人、作家。1996年、短歌連作「草かんむりの訪問者」で第7回歌壇賞、2006年、小説『いとの森の家』で第31回坪田譲治文学賞受賞。歌集『青卵』『十階』、小説『とりつくしま』『薬屋のタバサ』『トマト・ケチャップ・ス』『晴れ女の耳』、エッセイ集『七つ空、二つ水』、短歌入門書『短歌の不思議』、穂村弘との詩歌往復集『回転ドアは、順番に』、絵本『あめ ぽぽぽ』（絵・木内達朗）等、著書多数。自著の装画等のイラストレーションも手がける。

言葉の持つ音楽性

なぜわざわざ短歌という形に言葉を押し込めなくてはいけないのか、という、根本的なことを考えることはある。伝えたいことがあれば、思う存分自由に言葉を使って伝えればいいと思う。例えば、親しい友達や、愛する恋人同士ならば、いくらでも会話を続けたいと思うだろう。しかし、それほど親しくない人の言葉を、いつまでも聞いてみたくなるだろうか。「ごめん、忙しいので、要点だけ言って」と思うことだろう。五七五七七という、言葉の形と量が決まっている短歌は、不特定多数の読者に向けて無数の言葉の中から要点を絞り込む、という作業をすることでもある。

小説でいえば「あらすじ」、映画でいえば「予告編」のように、長い物語から要点をピックアップする作業であるといえる。あらすじや予告編ですでにわくわくすることがあるように、自分の身の回りで起きたことをポイントを絞って伝えることでわくわくしてもらえることがあると思う。

その上で一番大事なことは、五七五七七という言葉の形である。こうした言葉の定型は、「韻律」と呼ばれる。つまり、メロディーとリズムを持つ言葉なのである。短歌を作るというのは、言葉が持っている音楽性を五・七・五・七・七の定型を用いて引き出すこと、である。

ただ分かりやすく、効率よくものごとを伝えるだけなら、音楽性は必要ない。電気製品の解説書や、受験の参考書の文章、不動産の契約書などは、いちいち音楽性を意識しながら書かれていない。書かれていたら混乱することだろう（ちょっと楽しいかもしれないが）。

短歌は詩の一つの形なので、音楽性を意識して描かれた上で、通常の文章とは違う言葉の組み合わせが起きる。そのことによるその混乱から詩情を産み出してる、ともいえる。普通の文章とこうした韻文の違いは、ミュージカルに置き換えて考えてみると分かりやすいと思う。音楽等が

入らず、通常の会話を行っているシーンが通常の文章で、気分が盛り上がって歌い、踊り出すミュージックシーンが韻文なのである。ミュージカルも、内容をただ伝えたいだけだったら、わざわざ時間をかけて歌う必要はない。しかし、音楽とともに心を伝える言葉を歌い上げることで、興奮や感動を味わえ、深く心に届けることができる。短歌を作る、ということも、そういった要素が大きいのではないかと思っている。

口語で作る短歌

日本人は、千年以上も前から、恋愛感情や、死別の悲しみなどを短歌形式に込めて表現してきた。伝統的な詩型ということもあって、古い言葉遣い（文語）や、古い仮名表記（旧かな）で表現されることが多かったのだが、30年前、俵万智さんの歌集『サラダ記念日』が大ヒットしたことで、短歌の認識が大きく変わった。

思い出の一つのようでそのままにしておく麦わら帽子のへこみ

俵 万智『サラダ記念日』

「寒いね」と話しかければ「寒いね」と答える人のいるあたたかさ

俵 万智『サラダ記念日』

「この味がいいね」と君が言ったから七月六日はサラダ記念日

俵 万智『サラダ記念日』

これらは普段私たちが使っている文法（口語）で書かれており、普段使っている仮名遣い（新かな）で表記されている。俵さんの登場によって世間に新しいタイプの短歌が浸透したことで、最初から新かな、口語で作品を作る人が増え、今や定着した感がある。

私が短歌をはじめたのは、『サラダ記念日』が大ヒットしてから3年ほど経ってからのことで、最初から口語で短歌を作ることに抵抗はなかった。

短歌創作の直接のきっかけは、雑誌の投稿である。時々購入していた「MOE」という、童話や絵本の情報誌で、俵さんと同世代の歌人、林あまりさんが始めた短歌の投稿欄が新設されたので、作って送ってみたら、何度も採用されたのだった。

子供らが散らかした部屋を抜け出して何を探そうとしていたのだろう

東 直子『春原さんのリコーダー』

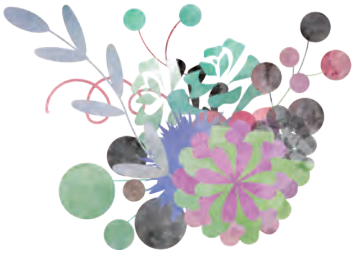
最初に林さんに選んでもらった一首である。当時1歳とゼロ歳の年子の赤ちゃんを育てていた。子どもはかわいいし、楽しいと思える時間もあるのだが、とにかく寝不足で何かと大変で、ふらふらだった。当時専業主婦をしていて、赤ん坊との閉塞感のある日常のくらしで精神的に追いつめられてもいた。その中で、短歌を詠み始めた。最初から、こういうことを詠もうと決めているというより、作りながら模索していた。模索している時点では、自分がなにを言いたいのか、分かっていないのだ。模索していると、もやもやしているということに気付き、さらに言葉を選んでいくうちに自分が抱えていた潜在的な気持ちに気付くのだ。

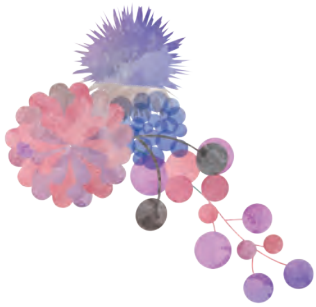
この歌は、日々散らかった部屋にいてうんざりしていたことを詠んだものだが、では他になにがしたいというのか、という自分自身に対する問いを引き出して、はっとしたのだった。自分の中から、もう一人の自分が現れたようだった。定型に添って言葉を整えていくうちに、心が見えてくる。短歌を作ることによって、それまで気付くことができなかったもう一人の自分に出会えるのだ。

夢の中の主人公が、普段の自分とはかけ離れた言動を取ることがあり、目が覚めてから驚くということがあるが、夢中で言葉の中の世界を探っていくうちに、自分でもびっくりするような感覚や考えを拾い上げてくることがある。それらは皆短歌形式という同じ形で整えられ、並べられる。そうすることで、他の人が拾い上げてきた感覚や考えと並べて比較することができる。それが定型詩のおもしろいところである。

一人で作り、仲間と楽しむ

短歌は形が同じなので、一覧表として眺めることができる。よって作者名を伏せてお互いに選びあう、互選





の歌会がよく行われている。点がよく集まった作品は、より共感を得たおもしろい作品である、という可能性が高く、後にその歌人の代表歌となっていくこともある。個人の文芸でありながら、文学的共有財産としてその価値を位置づけていく面があるのだ。

他の文芸、あるいは音楽などでも、専門分野の人間が批評し、文化財産としていく面はもちろんあると思うが、短歌は誰でも日常で使っている言葉で作る小作品であるために、批評の面でも様々なポジションの人間が関わることも大きな特徴だと思う。

一人で作るけれども、仲間とも楽しむ。そのことによる功罪はあると思うが、日常の利害関係や効率重視の社会的価値観から逃れて、小さな器の上の言葉を真剣に吟味していく時間は、いつもとても楽しい。

べくべからべくべかりべしべきべけれすずかけ並木来る鼓笛隊

永井陽子『樟の木のうた』

この歌は、初句から三句目までは、すずかけ並木を通りすぎていく「鼓笛隊」が鳴らす音楽を示すオノマトペ（擬音語）である。太鼓を叩くときの音の感じやリズムが如実に伝わってくるが、このオノマトペは、「べし」という助動詞の活用変化を現したものでもある。ある意味を持つ言葉の響きが、別のものを示すのにふさわしいことに気付いた、言葉に対する発見のある歌なのである。お茶目な一面もある一首で、このような、言葉を使って遊び心や実験性を発揮した作品は、言葉遊び的な作品として評価される。

恋人のむやみやたらなうやむやの夏のバターのあゝ塗りやすさ

中山俊一『ココア共和国』Vol.21

中山さんは、1992年生まれの若い歌人で、昨年9月に歌集『水銀飛行』を出版した。映像作品を作っていることもあり、独特な映像喚起力と物語性を含んだ作品を発表している。この歌は、やわらかいバターの質感と、「恋人」の不可解な存在感とを重ねあわせている。「や」という文字が5回も登場し、記憶の中にあるバターの質感に、音の感触を加えて感覚を強化している。この「恋人」が現実の恋人をモデルにしているかどうかは、不問のままでいい。この歌からは、とある夏の、とある一瞬を共有できれば、それでいいのである。

言葉を通して世界を感受する

終わったあとの火のさびしさを言い合えば火に淡雪を降らせる渚（なぎさ）

井上法子『永遠でないほうの火』

井上さんは、1990年生まれ。学生時代は早稲田短歌会に所属するとともに、現代詩の創作も続けている。言葉の孕む象徴性を生かし、詩的な喚起力のある作品を詠む。この一首では、まず祭のようなものが終わったあとに、まだ灯っている火に淡雪が降り積もっていく渚の風景を思い浮かべ、その淋しく冷たい景色が、心を示す風景へと移行する。「終わったあとの火のさびしさ」とは、恋愛関係が終わったあとにまだくすぶっている気持ちともとれるし、性愛の場面が終わったあとに残る熱としてもとれるだろう。いずれにしても、熱狂ののちに訪れる静かな余剰に浸ることができる一首である。

終電ののちのホームに見上げれば月はスケートリンクの匂い

服部真里子『行け広野へと』

服部さんも早稲田短歌会出身で、1987年生まれ。「月の匂い」という、

誰も嗅いだことのないものに、言葉で匂いを与えた。といっても「スケートリンクの匂い」なので、日常的なものではない。実際のその場から漂う匂いというより、「スケートリンク」という語のもたらす印象が選ばれたのだろう。氷であることのつめたさ、人工的な清潔感、さらに、スケーターの緊張感も加味されているのではないだろうか。

月の匂いを詠んだ歌として、百年前にこんな作品がある。

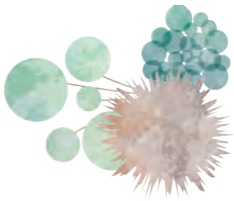
いざよひの
月はつめたきくだものの
匂をはなちあらはれにけり

宮沢賢治『宮沢賢治全集3』

夜空に煌々と照る月に、「つめたきくだもの」を感じ取った若き賢治の、独自のロマンティシズムが伝わる。

いずれにしても、空にぽっかり浮かんだ月の匂いを感じ取って誰かに伝えようなんて、日常生活ではまず行われないだろう。非日常の感覚を伝えあうのは、とても気持ちがよく、おおらかな心地になれる。月が光っている夜、という当たり前の世界が、豊かな奥行きをもって広がっていく。

私を、そして私をとりまく世界を、言葉を通じて新しく感受できる短歌作品に、これからも出会いたいと思っている。



音楽の万華鏡 39

日本の楽器展

「日本の伝統音楽の魅力―弾く、吹く、打つ」という日本の楽器の展示が行われている。こじんまりした展示の中に見どころが満載である。

日本の代表的な伝統楽器が、吹き物(管楽器)、弾き物(弦楽器)、打ち物(打楽器)という日本古来の楽器分類に基づいて、国立劇場での演奏舞台写真とともに展示されている。

弾き物の三味線は、長唄用の細棹三味線や、義太夫節用の太棹三味線など、演奏する音楽種目によって、多様な種類があることが示される。琵琶の展示は、雅楽用の楽琵琶、琵琶法師の平家琵琶、江戸時代に九州地方で誕生したユニークな盲僧琵琶、そこから生まれた薩摩琵琶と筑前琵琶が、誕生の時代順に並び、歴史の流れがわかるよう工夫されている。

日本の胡弓は、三味線とよく似た形をしていることを、三味線の隣に展示することで明示する。三弦、四弦の2種の胡弓のうち、四弦胡弓には、胴や棹に鶴亀や松竹梅、宝船といっためでたい図柄が、細かな蒔絵で描かれていて、演奏する人の思いが伝わってくるようである。

近世邦楽の箏(俗箏)の展示品は、「象牙包み」という技法で作られ、一見地味だが、楽器頭部の小口や脚、弦を乗せる龍角周辺の部分、尾部の柏葉などに、ふんだんに象牙が使われた贅沢な作りになっている。箏職人小川庄次郎氏が昭和10年代に制作したものである。

吹き物では、尺八と篠笛の展示とともに、紀州徳川家の第10代藩主徳川治宝(はるとみ)の楽器コレクションから、龍笛「青龍」と笙「鹿丸」が出品されている。

打ち物の鼓のコーナーでは、楽器だけでなく、鼓の胴に調べ緒で皮を固定する過程を写真で示している。あわせて、鼓胴のコレクションも並べてあり、演奏の際には、調べ緒に隠れてよく見えない鼓胴の美しい蒔絵を楽しむことができる。

このほか、錦絵に描かれた楽器のコーナーでは、歌舞伎の舞台図と、現在の舞台の演奏写真があわせて展示されており、比較してみると面白い。

また、6枚セットの美人画には、明治天皇を取り巻く女性たちが、雅楽の楽器とともに描かれている。

私事ながら、この企画のお手伝いをし、担当者の熱意と工夫に接してよい勉強をさせて頂いた。国立劇場伝統芸能情報館で10月27日まで。

薦田治子(本学音楽学教授)

笙を演奏する柳原愛子(大正天皇の生母)
『音楽美人揃』(国立劇場所蔵)より。

江古田新キャンパス探訪 2

クラシカルでありながらモダンな印象を併せ持つヨーロッパのサロン風ホール「モーツァルトホール」

（文：福井直昭 副学長）

江古田新キャンパスの魅力や設計に込められた意味を、新キャンパス建設のプロジェクトリーダーであった福井直昭副学長がナビゲーターとなってご紹介する本企画。第2回となる今回は、武蔵野にとっては非常に馴染み深いネーミングのモーツァルトホールを取り上げました。コンパクトなサイズながら、フレキシブルな使い方ができ、音響性能にも優れた同ホール。演奏会や試験で、今後大いに活用されることとなるでしょう。

▲ サロン風の趣のある内装が格調高いパイプオルガンと見事に調和している

神童の名を冠した3代目のホール

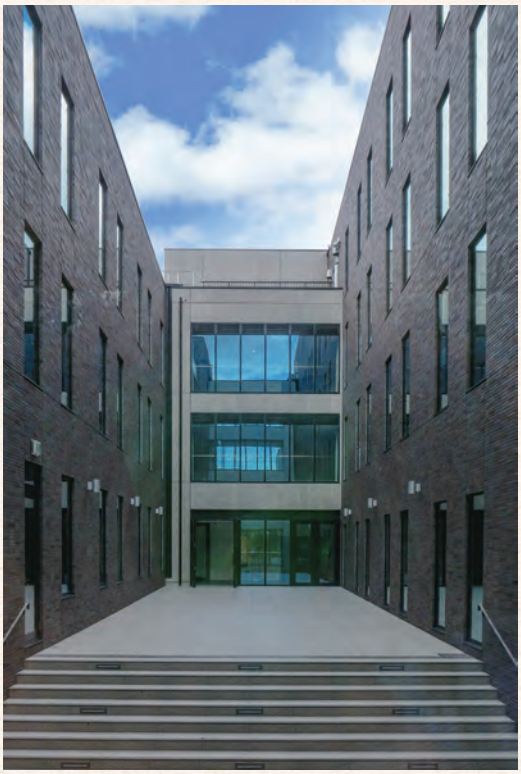
本学3代目となる「モーツァルトホール」は、リサイタル・室内楽用の約100席のホールです。室形状は約900㎡のシューボックス型で、クラシカルでありながらモダンな印象も併せ持つ、ヨーロッパのサロンをイメージした内装となっています。キャンパスの賑わい空間であるリストプラザから離れた北東部（N棟）に位置し、同じN棟にあるオーケストラ、ウィンドアンサンブル、大合唱のための大規模な各専用リハーサルホールはもちろん、北西部のベートーヴェンホールとブラームスホールに隣接しており、互いに連携した利用が可能です。またホール前の廊下はホワイエとしても機能するよう、壁や照明等に特別なデザインを施しています。したがってリストプラザから大階段でアプローチすると、象徴的なエントランス空間としての別な表情を感じることができると思います。

2代目モーツァルトホールのレガシー

旧江古田キャンパスの2代目モーツァルトホールから、伝統あるパイプオルガンを移設しましたが、このオルガンは1970年ドイツクライス社とヤマハ株式会社によって共同制作され、同年大阪で開催された万国博覧会（戦後、高度経済成長を成し遂げアメリカに次ぐ経済大国となった日本の象徴的な意義を持ったイベント）で使用されていたもので、その後武蔵野音楽大学と前述の両社との関係もあり、2代目ホールに設置されました。特徴的な中央の竹製のパイプ群は、このオルガンに独特の優雅な音色と装飾美を与えています。また同じく2代目のレガシーであるホワイエにあったモーツァルト像（ウィーン国立芸術大学より寄贈）も、当ホール内に据えられています。

演奏者の多様なニーズ・自由な演奏形式に対応

当ホールは、そのデザインのみならず、正面方向の切り替えに対応した使い勝手の良さも特徴です。つまりオルガンのある短辺側、その反対側となるモーツァルト像がある短辺側、および長辺側いずれも正面として使用できるわ



▲ リストプラザから大階段を上がると正面がホール入口

けです。吸音部位を分散配置して場所による響きの差を減らすようにし、また室内側に向けて壁面をわずかに湾曲させる形状をデザインに取り込みました。その結果、正面方向を切り替えても違和感なく利用できる室内音響となり、さらに光沢のあるベージュ色の吸音カーテンにより響きが変えられるため、竣工以来、演奏者の多様なニーズ・自由な演奏形式に応えております。さらに広域指向性のあるシーリングスピーカーはホール全体をカバーしており、各種講座にも適しています。㈱大林組技術研究所が室内音響予測を繰り返し工事に反映した結果、内装イメージに沿った重厚な響きが確保され、竣工時の残響時間の測定結果は1.8秒(500Hz、空席時、カーテンなし)となりました。

▲ 奥のカーテンは、響きを調節する役割がある

▲ 客席の配置を変えることで、また別の顔をのぞかせる

我々が当ホールに関し、設計を担当した㈱大林組に求めたそもそもの設計コンセプトは「小ホールでありながらもいかにも練習用ホール然としたものではない、通常の授業とは違うハレの場に相応しい雰囲気にすることにより、学生の意欲を最大限に引き出すこと」でした。今後も学生がお互いを触発し合う場として機能することを期待しています。

卒業生の留学life

様々な壁を乗り越え、演出家の道へ

小澤可乃（演出家）

イタリアで暮らすなかで元々好きだったオペラへの想いがさらに募り、トリノ音楽院の声楽科から演出科へ編入。優秀な成績で卒業後、プロの演出家の道を歩みはじめた小澤可乃さん。日本人が、しかも女性が本場でオペラの演出家になるには、様々な壁が立ちはだかっています。武蔵野での経験を活かし、夢に向かって邁進している小澤さんにお話を伺いました。

小澤可乃 *Kano Ozawa*

北海道旭川市出身。武蔵野音楽大学声楽専攻卒業、同大学院修了後、渡伊。トリノ国立音楽院演出科を首席で卒業。演出科で外国人初めての栄誉賞受賞。シラクーザのギリシャ劇場、トリノ王立劇場研修員も経た。ペルゴレージ作曲“奥様女中”でイタリアデビュー、初演が好評を得てミラノ各地で計5回の再演となった。クルト・ヴァイル“七つの大罪”、トリノ王立ヴェネリーア宮殿にて“Intermedi della Pellegrina”、平井秀明“かぐや姫”、サン＝サーンス“La princesse janue”他を演出。自身が出演する事も多い。これまでに手がけた作品がイタリア新聞 La Repubblica、La Stampa 他、JAPAN TIMES、音楽の友他に掲載。声楽を萩原尚文、青山智英子、Silvana Moyso、Eva Mei、Annunziata Lantieri に師事。演出を Paolo Ciaffi Ricagno に師事。

オペラの本場 イタリアのトリノ音楽院へ

――留学のきっかけは？ また、留学先をトリノ音楽院にした理由は？

小澤　武蔵野在学中から、イタリアに留学したいと思っていました。オペラへの思い入れが強く、絶対に本場のイタリアで学んでみたいと思っていたからです。初めは語学留学としてイタリア語を習得しながら歌のレッスンに通っており、日本人が多くいる環境に身を置いていました。次第に日本人が少ない大きな都市でチャレンジしてみたいと思い、トリノ音楽院への入学を決めました。私が入学した年は、声楽科で私の他に中国人が1人、アジア人の合格者は計2名という結果でした。「日本人だから」というどこか甘えられた環境から、イタリア人の友人に囲まれ、それまでの日本語を話すことができた環境から一変しました。

――トリノ音楽院声楽科入学後、演出科に編入されましたが、その経緯は？

小澤　トリノ音楽院での声楽の勉強は、ヨーロッパ人の歌声を生で聴きながら、どこが自分と違うのか、自分の持ち味はどこなのかを考える良いきっかけにもなりました。同時に、より一層イタリア語の習得にも力を入れて、積極的にイタリア語検定なども受けるように心がけました。しかし、イタリアオペラは日本の時代劇のように、昔の言葉や言い回しを使っており、実際に話す言葉とは違います。そのため、イタリア語を習得してもオペラの歌詞がわかるとい

▲ トリノの中心部にあるカステッロ広場

うわけではなく、イタリア語を知れば知るほど言葉の意味、ニュアンスを深く理解し、その面白さにものめり込んでいくうちに、色々な表現の仕方を自分なりに研究するのが楽しくなりました。言葉をきちんと理解することで更に表現の可能性が広がり、それを一つの作品として創り上げていくことの面白さを演出に見出したのです。総合芸術をこの手で創り出せる、そんな幸せがこの世にあるんだろうかって。そして偶然にも、トリノ音楽院はイタリアで唯一演出科がある国立音楽院だったのです。もう迷いはありませんでした。

▲ イタリアでの演出デビューとなった「奥様女中」。この作品では使用人ヴェスポーネも演じた

卒業時に名誉ある賞を受賞

――トリノ音楽院のカリキュラムや教授・学生たちの印象などを教えてください。

小澤　トリノ国立音楽院は、3年間の基礎課程と2年間の専攻課程のふたつに分かれています。演出科は2年間のコースだけで、学士号取得者のみ受けられるコースです。学校には生徒が企画し提案した演奏会の選考会もあり、そこで選ばれた企画が、その年に演奏会やオペラとして、学校のホールで公演されるという面白いシステムもあります。毎年多くの応募があるので、積極的な生徒達が様々なアイディアを出し合い、また、それを実現しようとする学校の姿勢にとても関心を持ちました。また、毎年開校記念日には先生と生徒達が共に演奏し、朝から晩まで一日中演奏会をするという、日本でいう大学祭のようなイベントもあります。演奏会ではユニークな演目が多く、普段は厳しい先生や校長先生までも演奏に参加し、生徒を笑わせてくれます。教授陣もとても親切な方が多く、人種などにとらわれることなく背中を押してくれ、とても勉強しやすい環境でした。

▲ トリノの老舗のカフェは何百年と歴史があり、1ユーロの美味しいエスプレッソ一杯で何時間も居座り演出の勉強をする事も多い

――演出科の内容、どのような勉強をされたかお聞かせください。また、卒業時に素晴らしい賞を受賞されたそうですね。

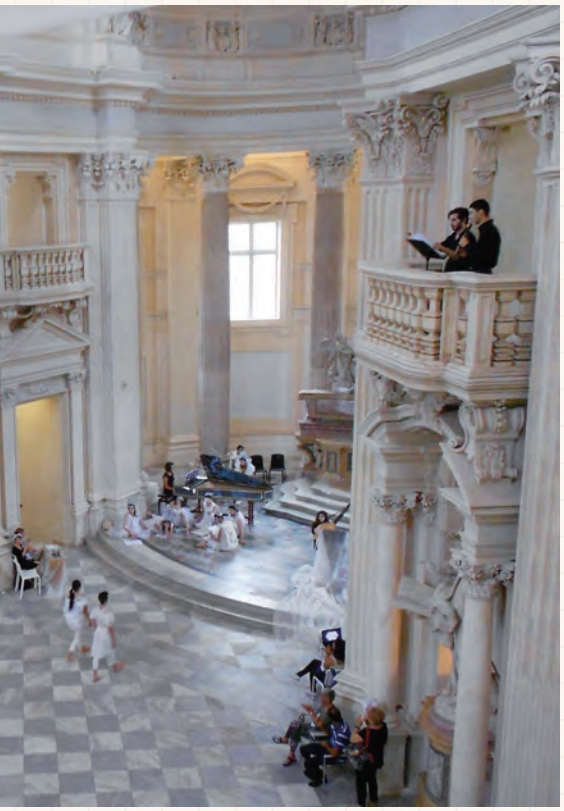
小澤　トリノ音楽院の演出科は、オペラだけに限らず様々な演出ができる環境にありました。詩の朗読と音楽を合わせたコンサートに演出をつけるなど、様々なアイディアを持つことで、コンサートやオペラだけに縛られず、様々な演出方法があることも学びました。また、私の師事した先生はオペラの演出だけでなく、ヴェネチア映画祭でも賞をとられた方で、パソコンのプログラムを使った映像技術も積極的に学ばせられました。最初はとても難しく苦労しましたが、おかげで古典的な演出だけに留まることなく、近代的な演出をする力も身につけることができました。また、卒業時に演出科では外国人で初となる栄誉賞を頂くことができました。この賞はイタリア人ですら簡単に頂ける賞ではなく、最高点以上の価値がある演出、また、その技術を持った人にだけ与えられる、とても名誉ある賞です。校長先生から口頭で発表されるのですが、私自身頂けると思っていなかったので、それを耳にした時は歓喜のあまり校長先生と抱き合い、喜びを分かち合い

ました。

アドベンチャーゲームのような毎日

――留学するために何を一番勉強しましたか？ 何が一番大変でしたか？

小澤　イタリア語がほとんど話せないまま渡伊したので、とにかく勉強しました。例えば運動が好きなので、プールでクロールをしながら動詞の活用形を頭の中で繰り返して、気がついたら1時間以上泳いでいた事などもありました。言葉が話せないと当然コミュニケーションが取れず、おしゃべり好きのイタリア人と肩を並べて笑い合うには、いち早くイタリア語の習得が必要だと感じました。私は性格的に仲良くなるまでがシャイなので、友好関係を築くにも少し時間がかかりましたし、文化の違いなどから色々と葛藤もありました。イタリア人とのルームシェアは、語学上達と、その文化を知るに当たってとても役立ちました。



▲ トリノ王立ヴェナリア宮殿での演出

――留学を希望している後輩たちへのアドバイスをお願いします。

小澤　留学はその国にたどり着くまで、事前の準備がとても大変です。でも、本当に大変なのは、現地に着いてから。カルチャーショックだけでなく、時に人種差別を受けることもあるかもしれません。日本では良しとされていたことが通じなくなる、新しい環境でだからこそ、努力、苦労が尽きませんし、スムーズに進むことはまずないと思っていた方がいいでしょう。ただ、私の場合、困難に立ち向かってそれを乗り越えて行く度に、自分の成長を感じていきました。今となっては、平和すぎる日常生活よりも、アドベンチャーゲームの中に入り込んだような生活に慣れてしまったのも、留学の面白い所だと思います。日本を離れてこそ気がつく自国の恵まれた環境、また自分をワンステップ成長させる場として、留学はとても魅力的だと思います。また、留学先で自分を見失わないよう信念を持ち続け、毎日努力すること。そうすれば、多くの困難に向き合っても進むべき道を見失わないはずです。

新鮮な風を吹かせたい

――現在、どのような活動をされていますか？

小澤　現在、一緒にタッグを組んでいるイタリア人の音楽仲間と、自分たちの手がけた作品を、こちらの劇場で再演できるように売り込んでいます。大変な作業ですが、自分たちで動くしかありません。また、音楽活動の他、翻訳や通訳、イタリア語の指導などもしています。

――武蔵野で学んだことで、いま役に立っていることは？

小澤　武蔵野で学んだ事は、本当に

私の原点だと思っています。武蔵野に在学した6年間、声楽の先生と一対一でのレッスンで学んだ、決して現状に甘んじないで、常に次のステップへ視野を広げ、目標を見失わないという環境で勉強ができた事は、不慣れな外国にいても「決して諦めない」という、自分へのパワーになりました。オペラコースの先生方を始め多くの先生方の熱心なご指導がなかったら、今の自分は存在していないと思います。

――今後の活動、抱負をお聞かせください。

小澤　ヨーロッパで演出のプロとして成功するには、アジア人としての壁、そして女性という立場にも難しさを感じています。私という人間を知った上で認めてくださる方がいても、まずは私を知ってもらうまでが大変です。演出の世界も一見華やかですが、実際には昔のしきたりが残っていて、オープンでないことが多々あります。そこに言葉の壁や人種が違えば、さらに困難となります。私はシャイな一面もあり、だからと言って黙っていてはチャンスは何もやってこない。自分で動かなければいけません。演出家は舞台には立ちませんが、舞台を創り上げていく上で、なくてはならない存在です。昔のしきたりを破って、これまでとは違う新しいイメージ、新鮮な風を吹かせていけたらと思います。

江古田新キャンパス竣工記念特別演奏会
ケマル・ゲキチ × 福井直昭 ピアノ・デュオリサイタル

去る6月30日、ベートーヴェンホールにおいて、本学江古田新キャンパスの竣工を祝う特別演奏会『ケマル・ゲキチ×福井直昭 ピアノ・デュオリサイタル』が行われました。華麗なテクニックを誇る世界的なピアニストであり、長年にわたり本学の客員教授を務めておられるケマル・ゲキチ氏。そして、リスト弾きとして知られ、内外で活躍している本学副学長の福井直昭氏。3度目の顔合わせで初の武蔵野での二人の演奏への期待と、江古田新キャンパスへの興味が相俟って高い関心を集め、急遽ステージ上に席を設けるほど人気は沸騰しました。

文字通り超満員の聴衆がステージを見つめる中スタートしたリサイタルは、いずれも2台ピアノ版によるプログラムで、前半は、リスト「交響詩《前奏曲（レ・プレリュード）》」、ブラームス「5つのワルツ」、ベートーヴェン「交響曲 第7番 イ長調」。卓越したテクニックと豊かな音色、熟練のデュオならではの息のあった極上の音楽が繰り広げられました。

後半のプログラムは、ラフマニノフ「前奏曲 嬰ハ短調《鐘》」、リスト「ハンガリー狂詩曲 第2番 嬰ハ短調」、同じくリスト「モーツァルトの歌劇《ドン・ジョヴァンニ》の回想」。この日演奏された曲目に関する作曲家は、ベートーヴェンホールを始め、ブラームスホール、モーツァルトホールやリストプラザなど、いずれも江古田新キャンパスのホールやエリアにその名を冠されています。

黒を基調とした衣裳の両人が向き合い、時に激しく時にやさしくピアノと対峙する姿は、あたかもスポーツの名勝負にも例えられるような緊張感をはらみ、聴衆は二人が創り上げる熱い音楽世界を堪能しました。

アンコールは、趣を変えてガーシュウィンを即興的に演奏。曲間のMCでは、福井副学長が客席の学生たちへ次のようなメッセージを送りました。「素晴らしいキャンパスを建ててくださった方々への感謝を忘れず、諸施設を活用しつつ勉強に練習に励んで欲しい。そして、学生時代の友達は一生の友達、音楽を一緒に学ぶ仲間と直接向き合い友情を育んで欲しい」と。

30分間にも及んだアンコールの最後は、リストの「半音階的大ギャロップ」。演奏終了時に二人が同時に両腕を突き上げた瞬間、客席からは大満足の拍手が巻き起こりました。

すべての校舎が建て替えられた新キャンパスの中、唯一保存され、改修・耐震化された伝統あるベートーヴェンホールでの開催。副学長が20年来憧れてきたゲキチ氏との再共演。客席に集った各界著名人、新キャンパスの工事関係者、武蔵野の先輩と後輩、未来ある若者たち。この日のリサイタルは、まさに「伝統と先進が響き合う未来へ」という、新キャンパスのコンセプトにふさわしいものとなりました。

各地で名演。ウィンドアンサンブル演奏会・管弦楽団演奏会

武蔵野音楽大学ウィンドアンサンブル演奏会が、7月11日、東京オペラシティ コンサートホール❶、7月15日、盛岡市民文化ホール 大ホールで開催されました。

指揮に米国の吹奏楽界の重鎮で本学名誉教授レイ・E.クレーマー氏を迎え、世界初演や本邦初演を含むオリジナル作品や「2017年度全日本吹奏楽コンクール」課題曲などを演奏しました。K.M.ヴァルチック「交響曲 第4番～＜私はあなたを見捨てない〉」は武蔵野音楽大学の委嘱で書き下ろし、今回が世界初演。ヴァルチック氏と親しいクレーマー教授の思いのこもった熱い演奏が印象に残りました。また、A.バーフィールド「レッド・スカイ」(日本初演)は、トロンボーン独奏に本学を卒業し名古屋フィル首席奏者として活躍する田中宏史氏を迎え、多彩なテクニックと幅広い音色で観客を魅了。C.T.スミス「フェスティバル・ヴァリエーション」では、学生達の高度な技量を巧みに引き出した名演を繰り広げました。さらに東京公演では、ショスタコーヴィチ「祝典序曲」のバンダに、伊奈学園総合、埼玉栄、花咲徳栄各高等学校の吹奏楽部の皆さんが賛助出演。舞台両脇バルコニー席に加わり、若さ溢れるエネルギッシュなサウンドを会場一杯に響かせ、華やかなフィナーレとなりました。

また、武蔵野音楽大学管弦楽団演奏会が9月17日、香川県の観音寺市民会館大ホール❷と9月19日、東京芸術劇場コンサートホールにて開催されました。

今回は内外楽団で幅広く活躍する末廣 誠氏を初めて客演指揮者として

❸

迎え、ベートーヴェン「ピアノ協奏曲 第5番 変ホ長調 Op.73〈皇帝〉」とマーラー「交響曲 第1番 ニ長調〈巨人〉」を演奏。〈皇帝〉では学生オーディションで選ばれた渡辺愛菜(音楽学部ヴィルトゥオーソ学科2年)❸、渡邊拓也(大学院ヴィルトゥオーゾコース2年)が、それぞれオーケストラと息の合った演奏を展開、後半の〈巨人〉では、複雑なスコアから醸し出されるマーラー独自の世界を一時間にわたり力強く表現し、会場から拍手が鳴り止みませんでした。

❶

❷

自然の中で附属音楽教室夏期ミュージックキャンプ開催

武蔵野音楽大学附属音楽教室、夏のイベント「夏期ミュージックキャンプ」が8月上旬に本学園の施設、軽井沢高原研修センターで開催されました。昨年同様、江古田、入間、多摩の3つの音楽教室が合同で行い、活気に溢れ楽しく充実した3日間になりました。

音楽面では、普段取り組む機会の少ない室内楽や連弾をはじめ、ピアノデュオ、合奏、合唱などの授業やレッスンを受けます。その成果を2日目の夜のコンサートで発表しますが、短い練習期間にもかかわらず、素晴らしい演奏を披露してくれました。またこのキャンプでは、先生と生徒が協力して、それぞれが受け持つ役割を果たしながら、責任感や団体生

活なども学びました。
　参加した小学3年生から高校3年生までの生徒達が、学年を越えて仲良くなれるのもキャンプならではの魅力のひとつです。親睦会や花火大会をはじめ、音楽以外にも楽しいイベントが盛りだくさん。夏の素晴らしい思い出になったことでしょう。

着任外国人教授紹介（平成29年度後期）

ジョン・ダムガード
John Damgaard（ピアノ／デンマーク）

デンマークのピアニスト。ウィルヘルム・ケンプ、ゲオルク・ヴァシャヘーリ、イロナ・コボシュのもとで研鑽を積む。デンマーク王立音楽院で助教授、武蔵野音楽大学にて1979年～81年まで客員教授を務めた後、1984年からはオーフス王立音楽アカデミー教授を務めた。世界各国で主に古典派とロマン派及びデンマークのピアノ音楽を含む作品のコンサートを行っている他、多くのコンクールで審査員を務める。

クリスティアン＝フリードリヒ・ダルマン
Christian-Friedrich Dallmann（ホルン／ドイツ）

ハンス・アイスラー音楽大学にてクルト・パルムのもとで研鑽を積んだ後、1978年にマルクノイキルヒェン国際音楽コンクールホルン部門で第1位受賞。同年ベルリン交響楽団（現ベルリン・コンツェルトハウス管弦楽団）のソロホルン奏者となり、以後22年以上首席奏者を務めた。古楽器による演奏活動もベルリン古楽アカデミーのメンバーとして行い、国内外への多くの演奏旅行とCDの録音を行った。現在はベルリン芸術大学教授として後進の指導にも当たり、優れたホルン奏者を多数育てている。

ロバート・ダヴィドヴィッチ
Robert Davidovici（ヴァイオリン／アメリカ）

ルーマニア生まれ。ジュリアード音楽院にてガラミアンに師事。カーネギーホール国際アメリカ音楽コンクール第1位受賞。以後幅広いレパートリーで世界的に演奏活動を行っている。大阪フィルハーモニー交響楽団、バンクーバー交響楽団等のコンサートマスターも務めた。フロリダ国際大学教授。

テリー・オースティン
Terry Austin（ウィンドアンサンブル指揮／アメリカ）

インディアナ大学で音楽教育を専攻、またハワイ大学で修士号、ウィスコンシン-マディソン大学で博士号を得る。現在はヴァージニア・コモンウェルス大学のバンド・ディレクターと教授を務め、同大学のシンフォニック・ウィンドアンサンブルの名声を全米に広めた。ゲスト・コンダクター、クリニシャン、審査員としても活躍するほか、音楽教育関連の著作も数多く執筆している。

平成29年度 同窓会全国総会開催

　去る8月8日、武蔵野音楽大学同窓会全国総会が、新装なった江古田キャンパスにおいて開催されました。
　当日は、全国各地から約460名余の同窓生が集い、総会前に設けられた新校舎の自由見学の時間には、この春新しく生まれ変わった江古田キャンパスを一目見ようと、大勢の皆さんが早々と集まり、随所に記念撮影の輪が拡がりました。
　総会はブラームスホールで開催され、最初に、福井直敬同窓会会長・本学学長の挨拶があり、新キャンパス建設の経緯や今後の武蔵野の学修システム等について話されました。続く総会議事も滞りなく進み、最後に、各地から多数参加された支部長の紹介があり、日頃の同窓会発展へのご尽力に感謝の意を表し和やかに終了しました。
　総会後、キャンパスレストラン“Intermezzo”で懇親会が開かれ、久しぶりの再会を喜ぶ同窓生同士、思い出話や近況報告、また新しいキャンパスの話題に花が咲き、大いに賑わい、母校の発展を喜びながら盛会裏にお開きとなりました。帰路につく皆さんの表情には、これからの武蔵野への期待が溢れていました。

平成29年度 武蔵野音楽大学・附属高等学校 冬期講習会のお知らせ

講習会名	実施期間	申込受付期間	会場
音楽大学受験講習会	平成29年12月23日(土・祝)～26日(火)	平成29年11月28日(火)～12月12日(火)	武蔵野音楽大学江古田キャンパス
高校受験講習会	平成29年12月24日(日)～26日(火)	平成29年11月28日(火)～12月12日(火)	

◎講習会要項の請求は、大学ウェブサイトからお申し込みいただくか、本学広報室（TEL.03-3992-1125）へお電話にてご請求ください。
　本学ウェブサイト　http://www.musashino-music.ac.jp/

武蔵野音楽学園教育運営推進協力寄附金　ご寄附をいただいた方々

学校法人武蔵野音楽学園では、寄附金に対する税額控除制度の恩典が与えられたことに鑑み、教育環境整備基金、福井直秋記念奨学基金並びに演奏活動特別基金の拡充を目的とする寄附金を募集しましたところ、下記の方々よりご寄附をいただきました。ここにご芳名を掲載し、深く感謝の意を表します。　学校法人　武蔵野音楽学園

※ご芳名（五十音順）は、平成29年5月21日から7月31日までにご寄附いただいた方々です。それ以降の方々は、次号にて掲載させていただきます。また勝手ながら掲載区分は当方で決めさせていただきました。何とぞご了承ください。

※本学ウェブサイトからも、ご寄附いただけるようになりました。クレジットカード決済により簡単にお手続きができます。是非ご利用ください。

【同窓生】池田松洋様　石渡百合子様　上田一江様　打越孝裕様　大月裕子様　大坪亮子様　大矢元子様　金井真由美様　小林貴美子様　小森健児様　志賀訓子様　関谷良子様　髙野光子様　巽 蔦枝様　永田伸子様　林 朋子様　常陸純子様　廣田詩織様　堀内照子様　槇 絢子様　槇 健斗様　間瀬木ひとみ様　松浦靖子様　南 明子様　宮下悠紀子様　森岡 翠様　森岡 都様　山中源子様　山本玉枝様　吉﨑憲治様　同窓会富山県支部様　同窓会兵庫県支部様

【在学生・同ご父母】飯高光博様　伊勢福修司様　井上加代様　今牛孝昌様　遠藤裕二様　大島有香様　太田節雄様　大沼雅美様　小野里英明様　加藤 太様　河野和之様　菊地典子様　岸本文孝様　栗原宏樹様　小峰則明様　齊藤仁志様　先村美保様　佐久間康行様　佐藤幸三様　新藤達雄様　髙橋伸夫様　武井孝博様　武田和幸様　巽 保夫様　田中慎二様　田中利彦様　棚瀬裕文様　辻 広巳様　寺本眞一様　中谷 泰様　中村 悟様　増田美香様　松田 実様　三浦 周様　山本淳子様　横手宏行様　若林健太様　久留米運送株式会社様

【役員・教職員・一般・他】池 成啓様　池田京子様　上原正子様　大久保 薫様　加島良和様　河島祐嗣様　佐藤しのぶ様　佐野悦郎様　関根弘美様　耕 修二様　中川俊宏様　野村邦武様　日髙正枝様　古谷輝子様　COFFEE モカ様　株式会社新演様　株式会社ヤマハミュージックジャパン様　株式会社ヤマハミュージックリテイリング様　（他に匿名を希望される方31名）

栄冠おめでとう！（コンクール入賞者等）

（順不同、敬称略、経歴は受賞時のもの）

- 旭日双光章受章　西部邦彦（昭和39年大学サクソフォーン専攻卒業）
- 東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団に首席トランペット奏者として入団（平成29年7月）
  松木亜希（平成19年大学トランペット専攻卒業）
- Accademia Musicale Jacopo Napoli International Piano Award “Jacopo Napoli”（イタリア）　第2位入賞
  野上 剛（平成24年大学ピアノ専攻卒業、本大学院修了）
- 第34回日本管打楽器コンクール　パーカッション部門　第3位入賞　山口芽依（大学2年打楽器専攻）
- 第19回“万里の長城杯”国際音楽コンクール　声楽部門　一般の部A　第1位入賞、審査委員長賞受賞
  須田みづき（平成17年大学声楽専攻卒業）
- 2017 12th アジア国際音楽コンクール　大学生ピアノ部門　第1位入賞　伊藤菜々子（大学3年ピアノ専攻）
- 第3回K金管楽器コンクール　第1位入賞　長岐愛実（平成29年大学ホルン専攻卒業）

※上記の他多数。大学ウェブサイトをご覧ください。

平成29年度　武蔵野音楽大学 オープンキャンパス・学校説明会・声楽クリニック

武蔵野音楽大学音楽学部への進学を検討している皆さん、並びに、指導者、保護者、ご家族、卒業生の皆様を対象に、オープンキャンパス、学校説明会を開催します。

また、専門的な「歌」のレッスンを体験してみたいという小中高生の皆さんを対象とした、本学講師陣による声楽クリニックを開催します。

※各催し物は事前のお申し込みが必要です。詳細につきましては、本学ウェブサイトをご覧ください。

【お問合せ】武蔵野音楽大学入学センター　TEL.03-3992-2500
E-mail: nyugaku-c@musashino-music.ac.jp

日付	種別	開催地
10月　9日(月・祝)	オープンキャンパス（授業・レッスン公開）	江古田キャンパス
10月22日(日)	学校説明会	北海道函館市 「ヤマハミュージックリテイリング函館店 函館中央センター」
11月　5日(日)	声楽クリニック	江古田キャンパス
12月10日(日)	オープンキャンパス（レッスン公開）	江古田キャンパス

平成30年度 入学試験要項請求について

武蔵野音楽大学の各入学試験要項は、江古田キャンパスで取り扱っています。

郵送をご希望の方には無料でお送りいたしますので、本学ウェブサイトの「資料請求フォーム」からご請求ください。お電話でのお申し込みは、氏名、住所、電話番号、および希望される入学試験要項の種別（附属高校、大学1年次、大学3年次編・転入、大学院、別科）をお知らせください。

なお、冬期受験講習会を受講の方には、講習期間中に配付します。

【要項請求先】
武蔵野音楽大学 広報室
〒176-8521　東京都練馬区羽沢1-13-1
TEL.03-3992-1125
本学ウェブサイト
http://www.musashino-music.ac.jp/

平成 29 年度 10月～12月 演奏会のお知らせ

入間市「第38回 市民コンサート」武蔵野音楽大学管弦楽団演奏会
10月14日(土) 14：00 バッハザール（入間） 無料〈全席自由・要入場整理券〉
主催・お問合せ＝入間市立中央公民館 TEL.04-2964-2413 ※入間市立中央公民館へ直接お問合せください。
指揮＝北原幸男
ファゴット独奏＝上田実那（大学院1年・本学学生オーディション合格者）
曲目＝チャイコフスキー：スラヴ行進曲 Op.31、モーツァルト：ファゴット協奏曲 変ロ長調 K.191、ベートーヴェン：交響曲 第7番 イ長調 Op.92

ペーター・ヤブロンスキー ピアノ・レクチャー＆コンサート
通訳＝重松万里子 10月20日(金) 18：30 ベートーヴェンホール（江古田） ￥1,000〈全席自由〉
曲目＝リスト：バラード 第2番、ヤブロンスキー：バラード 第1番 他

音楽学専攻学生企画演奏会「フランス国民音楽協会の挑戦」
11月 6日(月) 18：30 ブラームスホール（江古田） 無料〈全席自由・入場整理券不要〉

マイク・ロイランス（ボストン交響楽団首席奏者）テューバ・レクチャー＆コンサート
通訳＝大塚哲也 11月 6日(月) 18：30 ウィンドアンサンブルホール（江古田） ￥1,000〈全席自由〉

武蔵野音楽大学合唱団演奏会 11月 8日(水) 19：00 ベートーヴェンホール（江古田） ￥1,500〈全席自由〉
指揮＝栗山文昭、片山みゆき
曲目＝グレゴリオ聖歌：ミサ9番より、コダーイ：ミサ・ブレヴィス 他

ロバート・ダヴィドヴィッチ（Vn.）＆イリヤ・イーティン（Pf.）デュオ・リサイタル
11月10日(金) 18：30 ブラームスホール（江古田） ￥1,000〈全席自由〉
曲目＝ラヴェル：ツィガーヌ、フランク：ソナタ イ長調 他

ニュー・ストリーム・コンサート32 ～ヴィルトゥオーソ学科演奏会～
出演＝金子絢香（Ob.）、渡辺愛菜（Pf.） 11月15日(水) 19：00 トッパンホール ￥1,500〈全席自由〉
吉尾悠希（Sax.）、吉原麻実（Pf.）、中野一麻（Fl.）、古市明里（Pf.）

ワルター・アウアー（ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団首席奏者）フルート・レクチャー＆コンサート
通訳＝岩下智子 11月24日(金) 18：30 ベートーヴェンホール（江古田） ￥1,000〈全席自由〉

インゴ・ゴリツキ オーボエ公開レッスン 11月28日(火) 18：30 ウィンドアンサンブルホール（江古田） ￥1,000〈全席自由〉
通訳＝青山聖樹

イリヤ・イーティン ピアノ・リサイタル 11月30日(木) 18：30 ベートーヴェンホール（江古田） ￥1,000〈全席自由〉
曲目＝シューマン：交響的練習曲 Op.13 他

武蔵野音楽大学ウィンドアンサンブル演奏会 12月 4日(月) 18：30 東京芸術劇場 コンサートホール ￥1,500〈全席指定〉
指揮＝テリー・オースティン
曲目＝ティケリ：交響曲 第2番、マスランカ：我らに今日の糧を与えたまえ、ジルー：ヴィジルス・キープ 他

武蔵野音楽大学室内合唱団演奏会 12月 6日(水) 19：00 ベートーヴェンホール（江古田） ￥1,000〈全席自由〉
指揮＝栗山文昭、片山みゆき ピアノ＝齋藤誠二
曲目＝グレゴリオ聖歌、モンテヴェルディ：波はささやき、バルトーク：4つのスロヴァキア民謡、萩原英彦：混声合唱組曲《光る砂漠》 他

武蔵野音楽大学管弦楽団演奏会 12月11日(月) 19：00 東京オペラシティ コンサートホール ￥1,500〈全席指定〉
指揮＝時任康文
独唱＝木原理菜（Sop.）、月下愛実（Sop.）、福士紗希（Sop.）、和田朝妃（M.Sop.）、森谷真理（Sop.）
曲目＝ヴェルディ：《運命の力》序曲／〈とうとう着いた。神よ感謝します〉、《椿姫》より〈不思議だわ！～ああ、そはかの人か～花から花へ〉
チレア：《アドリアーナ・ルクヴルール》より〈苦い喜び、甘い責め苦〉
ドニゼッティ：《シャモニーのリンダ》より〈この心の光〉、《ランメルモールのルチア》より〈香炉はくゆり〉
ラフマニノフ：交響的舞曲 Op.45

松本美和子 ソプラノ・リサイタル＆ミニレクチャー
ピアノ＝ヴィンチェンツォ・スカレーラ 12月13日(水) 18：00 ブラームスホール（江古田） ￥1,000〈全席自由〉
曲目＝イタリア、ドイツ、フランスの古典・ロマン派歌曲より ドヴォルジャーク：《ルサルカ》より〈月に寄せる歌〉 他

お問合せ ●武蔵野音楽大学演奏部 TEL.03-3992-1120
※やむを得ない事情により、出演者・曲目等を変更する場合もありますので、あらかじめご了承ください。
※チケットは武蔵野音楽大学ウェブサイト http://www.musashino-music.ac.jp/ でも予約ができます。

編集後記

歌人の東直子さんが指摘された、「言葉を歌い上げることで、興奮や感動を味わえ、深く心に届けることができる」というミュージカルと短歌の共通点。非常に興味深いものがありました。また、オペラの演出家になるべくイタリアで奮闘中の小澤可乃さんは、様々なことが連続して起こる留学生活を「アドベンチャーゲームの中に入り込んだような生活」と例えています。苦労も楽しんでしまう、そんな心の余裕が頼もしく感じられます（編）。

アステカの土笛

メキシコ　全長17～37cm

カラフルに色付けされたヘビ、カメ、ワニやイヌたちは、大集合するとまるで小さな動物園のようである。楽器というよりもむしろ置きもののような愛らしさで見る者の心をつかむ。12世紀から16世紀にメキシコで栄えたアステカ文明の遺跡からは、このようなさまざまな生きものや人を模(かたど)った土笛が、土器などと共に出土されている。写真の楽器は、このアステカ時代の土笛を模して作られたものである。

アステカの人々は、大自然や生き物、祖先など宇宙の万物に対して畏敬の念をもち、神格化して信仰の対象としてきた。太陽神、雨神、水神、トウモロコシの神などの神々は偶像化されて神話の中で生き、建築、工芸といった生活のあらゆる場面に取り入れられて崇拝されてきた。中でもケツァルコアトルの名で知られる「羽毛をもつ蛇神」に代表されるように、ヘビはアステカの人々にとっては神聖視する特別な存在で、ヘビをモチーフとした土笛は写真に見られるように多く確認することができる。カメは音楽の神、イヌは死者の霊魂を案内する存在として知られている。また、アステカは軍国主義国家としても知られており、戦士もモチーフとして登場しているが、特に信仰の対象であるジャガーやワシを身にまとった「ジャガーの戦士団」と「ワシの戦士団」（右写真）はその最高峰に位置するものである。愛らしい置きもののようなこれらの土笛は、実はアステカの世界の神々や最高峰の戦士たちを模(かたど)ったものだったのである。

16世紀、このアステカの楽器はスペイン人によってヨーロッパにもたらされた。その後、1860年頃イタリアのジュセッペ・ドナティの改良によって、現在世界中ですっかりポピュラーとなったオカリナが誕生したのである。

（武蔵野音楽大学楽器博物館所蔵）

目 次

短歌の音とイメージの広がり …… ❶
東 直子

音楽の万華鏡 …… ❹
日本の楽器展　薦田治子

江古田新キャンパス探訪② …… ❺
モーツァルトホール

卒業生の留学ライフ …… ❼
様々な壁を乗り越え、演出家の道へ　小澤可乃

MUSASHINO NEWS …… ❿
- 江古田新キャンパス竣工記念特別演奏会
  ケマル・ゲキチ×福井直昭 ピアノ・デュオリサイタル
- 各地で名演。ウィンドアンサンブル演奏会・管弦楽団演奏会
- 自然の中で附属音楽教室夏期ミュージックキャンプ開催
- 着任外国人教授紹介（平成29年度後期）
- 平成29年度 同窓会全国総会開催
- 平成29年度 武蔵野音楽大学・附属高等学校 冬期講習会のお知らせ
- 武蔵野音楽学園教育運営推進協力寄附金　ご寄附をいただいた方々
- 栄冠おめでとう！（コンクール入賞者等）
- 平成29年度 武蔵野音楽大学
  オープンキャンパス・学校説明会・声楽クリニック
- 平成30年度 入学試験要項請求について
- 平成29年度 10月～12月 演奏会のお知らせ

武蔵野音楽大学大学院
博士前期課程・博士後期課程
武蔵野音楽大学
武蔵野音楽大学別科
武蔵野音楽大学附属高等学校
武蔵野音楽大学第一幼稚園
武蔵野音楽大学第二幼稚園
武蔵野音楽大学武蔵野幼稚園
附属音楽教室 江古田・入間・多摩

発　行
学校法人 武蔵野音楽学園

江古田キャンパス　●〒176-8521 東京都練馬区羽沢1丁目13-1
TEL.03-3992-1121（代表）
入間キャンパス　●〒358-8521 埼玉県入間市中神728
TEL.04-2932-2111（代表）
パルナソス多摩　●〒206-0033 東京都多摩市落合5-7-1
TEL.042-389-0711（代表）
http://www.musashino-music.ac.jp/

2017年10月1日発行　通巻第123号